Research Institute for World History
Newsletter
No. 27 April 2016

CONTENTS

■ 文献紹介　パトリック・マニング『世界史をナビゲートする－地球大の歴史を求めて』
木村英明 — 1 頁
■ 新刊紹介 『新しく学ぶ西洋の歴史－アジアから考える』 秋山晋吾 — 5 頁
■ RIWH アフリカ奨学基金第 4 期 ご寄附のお礼 — 7 頁
■ 『21 世紀歴史学の創造』の寄贈先を募集します — 7 頁

発行： NPO-IF 世界史研究所 http://www.npo-if.jp/riwh/

世界史研究所「ニューズレター」
第 27 号（2016 年 4 月）

文献紹介

パトリック・マニング（南塚信吾、渡邊昭子監訳）
『世界史をナビゲートする－地球大の歴史を求めて』
彩流社、2016 年
Patrick Manning, *Navigating World History: Hisorians Create a Global Past*, 2003.

木村英明（世界史研究所）

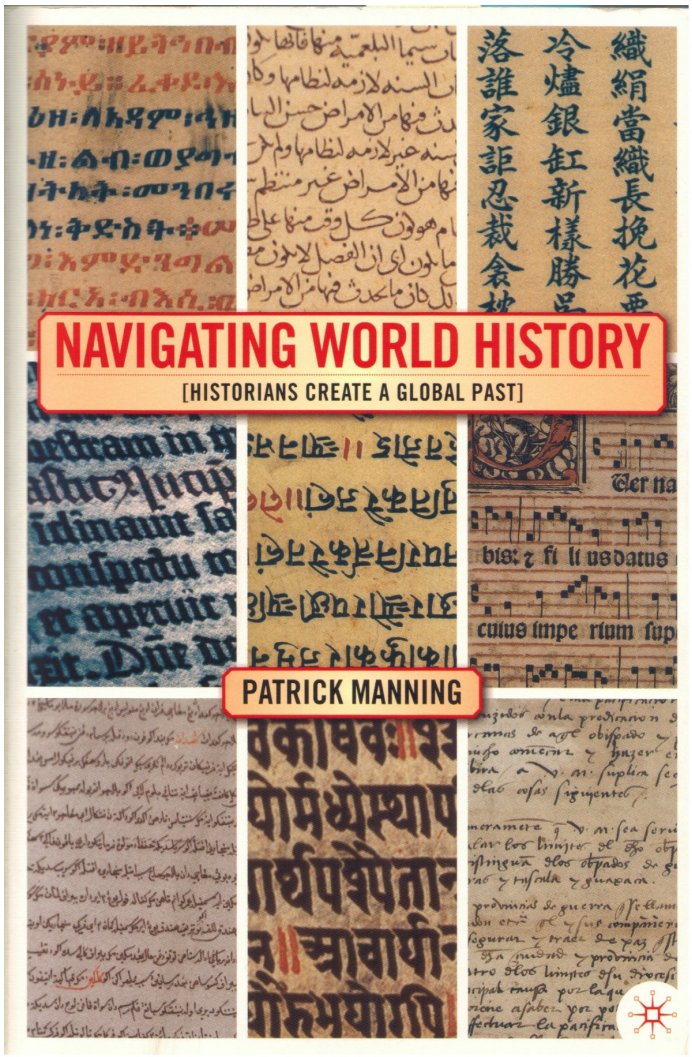
標題に「世界史」の文字を掲げた本は間断なく書店の棚をにぎわしているし、中等教育のカリキュラムや大学入試に占める世界史の比重も大きいものであり続けている。そのいっぽうで、専門の研究分野としての世界史となると、いまだにその位置は日本のみならず世界の多くの地域で確とは定まっていないのが実情だろう。1980 年代以降急速に進むグローバリゼーションのなか、その位置の重要性と可能性を研究・教育の双方の場で追求してきた先駆者のひとりが、ピッツバーグ大学世界史研究センター所長のパトリック・マニングである。本世界史研究所は創立当初より、氏から世界史を構想するうえで核となる視野の持ち方、叙述の方法論など様々な直接的助言、間接的刺激を受けてきた。今回、その主要著作のひとつである『世界史をナビゲートする－地球大の歴史を求めて』が、南塚信吾（本研究所所長）、渡邊昭子（大阪教育大学）両氏の監訳により出版の運びとなった。

本書は、著者の言葉を借りれば「地球規模の歴史的諸問題について研究するための指針」を学生、教員、研究者に提示する意図で書かれた。具体的には、世界史研究の歴史、その思考と語りの様々な様式を紹介し、さらに大学・大学院における学習カリキュラムの実践にまで言及することで、専門領域としての世界史が持つ可能性の範囲を示そうとしている。以下に、5 部 23 章からなる本書の大枠を紹介する。

第1部「世界史の展開」は、古代から現代にいたる世界史の語り方の変遷をたどる、いわば史学史である。その際、「1900 年までの歴史哲学」、「1900 年から 1964 年までの地球大での総合」、「1965 年から 1989 年までのテーマ的世界史分析」、「1990 年以後の専門的研究の組織化を伴う世界史分析」の４つの次期区分が設けられている。まず、資料に依拠することが困難であった 20 世紀以前の歴史家が、共同体の起原と展開、その世界性を記述するにあたっては、基本的に哲学的思考に依らざるを得なかったことを、聖職者の＜普遍史＞、哲学者の＜理論的世界史＞、「文明」や「国民」の議論の登場などを通して概観している。次いで 20 世紀に入って登場する、ヨーロッパ文明の特権的地位に疑義の目を向け、文明の変容や各文明間の相互作用の観点から世界史の総合を試みた歴史家（シュペングラー、トインビーらを経てマクニールに至る）の業績が語られる。この大きな総合の時代に続き、20 世紀後半には、全体の概観ではないものの、世界史的視野を持つ研究、すなわち一連のテーマ的分析が発達したとする。ここでは、アフリカ史や奴隷貿易を世界史に接続したフィリップ・カーティン、世界システム論のイマニュエル・ウォーラーステイン、国民や文明の境界を越える地球規模の生態系史を描いたアルフレッド・クロスビーに焦点が当てられている。最後に、1990 年代以降の近年の段階として、世界史の研究と教育の制度がアメリカ合衆国において整えられていく過程を紹介しながら、地球大のアプローチを持つ地域研究（たとえば中国経済とヨーロッパ経済の比較から世界経済を論じたケネス・ポメランツ）、ジェンダーや科学技術などのいっそう厳密なテーマ研究、さらに地域とテーマを横断する研究などの登場が語られる。ヨーロッパ史とアメリカ合衆国史を世界史の中に位置づけるために、ヨーロッパ中心主義を乗り越えようとするいくつかの試みについて触れていることも興味深い。

第2部「歴史研究における革命」は、20 世紀後半に発展した諸学問の分野との接触、地域研究、およびグローバル・スタディーズの三つの枠組みが、歴史学にどのような変容をもたらし、それらが世界史研究にいかに適用可能かついて詳述する。他の学問領域からの影響については、たとえば社会史は一般に経済学や人口統計学など、ジェンダー研究は言語学や心理学など、様々な他の領域に依拠していることが例示される（またここでは、他の学問領域はもちろん、歴史学の進展にたいして、コンピュータによる資料の計量化が果たした意義についても強調されている）。地域研究はもともと政治、経済、文化現象などを広く扱う学際的性格を持つが、なかでも歴史は常に考察の中心におかれてきた。地域研究の成果が歴史研究にもたらしたトピックとして、奴隷制、地域内の商業と地球規模の商業、家族と社会変化、帝国と植民地主義、ナショナリズムと国民アイデンティティなどを著者は挙げている。そして、それらが有する多国籍的で分権的な、言語や文化を横断する傾向が、世界史へのコスモポリタンなアプローチの展開に不可欠であったと指摘する。さらに、地域研究が欧米の歴史を特権化する視座を相対化し、第三世界の歴史として世界史を考える枠組みの構築にも寄

与している点を重要視する。1990 年代に一般に認知されるようになったグローバル・スタディーズについては、グローバリゼーションの大きなうねりがもたらした影響という点で、とりわけ世界史研究との親近性が語られやすそうにみえる。両者とも地域やテーマを横断する枠組みの有効性を認識しているからである。ところが、著者によれば、グローバル・スタディーズは地域研究と異なり、ほとんど歴史には目を向けようとしない。新たにアメリカの大学に設立されたその研究機関も、現在の政治、経済、生態学的な問題を対象とし、過去を参照することなしに世界の未来を構想しようとする傾向を持つため、歴史家はこれに参画していないという。唯一の全体としての世界を研究の単位に据えて小さい単位は無視する、また文化研究には目を向けないなど、世界史研究とは相容れないベースに立つグローバル・スタディーズは、学問分野を形成するというよりも、学問研究のベースの一つを提供するものと捉えられている。



第3部「近年の研究成果」は、第2部で述べられた上記三つの枠組みが世界史研究の問題にどのように応用され、いわゆる＜新しい世界史＞の記述が形成されていったかをたどっている。具体的に政治史、経済史、社会史、生態系、科学技術、健康、文化史の7つの下位分野に分けて、その成果が紹介されている（本稿では個々の研究については触れず、研究の傾向についてのみ粗略する）。まず政治史については、長期的な政治の語り、つまり初期国家の成立から帝国の発展、異なる地域での帝国システムの周期的興亡、現在に至る支配権力の継承が、その主要な語りとして採用されていると指摘する。いっぽう、経済史においては、生産の中心と富の中心双方に作用する長距離交易システムの拡大が主要な語りになっている。世界史研究者の課題として、地方の統治・代議機関、国制の原理などをもっと取り上げ、統治の機構と原理について長期的持続と変容を扱うべきであることをあげている。地球規模の経済史については議論に前進が見られるとはいえ、その多くが＜支配＞についてのもので、＜結

びつき＞においては十分に語られていないことをあげている。社会史による「下からの歴史」、「日常生活」研究は20世紀後半の歴史学の先端にあったが、世界史が目指す地球規模レベルの調査には適用が難しい。しかし、地域的パターンとしてのみ分析されがちな民族、宗教、社会階級や家族といったトピックが徐々に世界史研究に取り入れられつつある。たとえば、家族あるいはジェンダーの問題も、ヨーロッパの植民地拡大による長期的パターンの変化から分析するといった研究が出てきている。生態系、科学技術、健康の三つについては一つの章にまとめて紹介されており、その著作の多くが歴史以外の研究者によって書かれてきたこと、地球環境にたいする関心の高まりが読者層の拡大につながっていることをあげて、上記３分野に共通項を見いだしている。そこで扱われるトピックはきわめて多岐に渡る。気候から微生物にいたる生態系、衣食住や道具、産業などの様々な科学技術、栄養や疾病、医療を含む健康の各領域が、それらの変容と人類の歴史的局面との関わりから語られることで、歴史研究の説得力はいっそう高まることになるだろうと筆者は展望する。最後の文化史については、マクロ文化的アプローチとミクロ文化的アプローチというユニークな用語法を導入している。従来の文化史がたとえば「フランス文化」といったような諸国民・諸文明の差異を強調するようなマクロ研究であるのに対して、新しい文化史は＜物質文化＞、＜表現文化＞、＜精神文化＞のカテゴリーからさらに「衣服」、「食」、「音楽」、「舞踊」、「宗教」、「教育」等々の細分化された項目に向かうミクロ研究であるとする。前者は文化の構造に、後者は文化の過程にアクセントがおかれる。著者は、いずれのアプローチにおいても、世界史に貢献する方向性は文化接触に関する研究であると考える。

第4部「世界史における分析の枠組み」は、大学院生レベルの研究者にむけて、研究の構想と遂行の手法、さらに解釈の正当性の検証と提示方法の指針を解説する。まず、構想段階における時間と空間のスケールの選択、トピックの範囲とトピック間の相互作用の力学把握などの重要性について例示し、１年間に世界で起きた出来事を扱った著作（ジョン・ウィルズの『1688 年：グローバル・ヒストリー』(*1688: A Global History*)）や数十億年に渡る過程の分析（フレッド・スピアら）、また大陸や大きな水域への注目（フェルナン・ブローデルら）などに言及している。次いで研究の遂行にあたって用いられる道具立てとして、＜類型化＞、＜パラダイム＞、＜ネットワーク＞、＜喩え＞等をあげてその機能を概説する。検証作業としては、論理の一貫性、別の選択肢と比較しての解釈の効果、解釈と記述された証拠との首尾一貫性の三段階を提示し、ジェリー・ベントレー『古き世界との遭遇』(*Old World Encounters: Cross-Cultural Contacts and Exchanges in Pre-Modern Times*) ほか３作を取り上げて実際にそれを適用してみせる。歴史の提示については、著者はその形態がおもに「語り」であるとし、「語り」が分析の論理を明確にしたり、混乱させたりすることがあると指摘する。反面、ヘイドン・ホワイトによる歴史記述のレトリックの議論を紹介し、その議論がホワイトによって評

された各歴史家のメッセージ自体を損なうものではないとも述べている。

第5部「世界史の研究と学習」は、大学院の世界史学習プログラムの発展と展望を詳述する。そのほとんどはマニング自身がかかわってきたアメリカの大学における制度上の問題であり、日本の高等教育機関で世界史教育をいかに組織して行くかという観点から見逃せない多くの示唆を含むが、ここでは割愛させていただく。

最後に、マニングはこの著書を通じて、確立された世界史研究の姿を描こうとしているわけではないことを確認しておく。あくまで、無限のトピックに満ちた広大無辺な世界史の時空間を航海し、世界史という分野で一定の成果をあげるために役立つであろう羅針盤を提供しようという試みなのである。その羅針盤を動かす磁石の極性は、ひと言に集約すれば＜結びつき＞ということになるだろう。それは、著者によれば「極地性と唯一性を認め、それでもなお幅広いパターンを連想させる」ものなのである。

マニング氏と南塚（世界史研究所所長）、アジア世界史学会天津会議（2008 年 5 月）にて

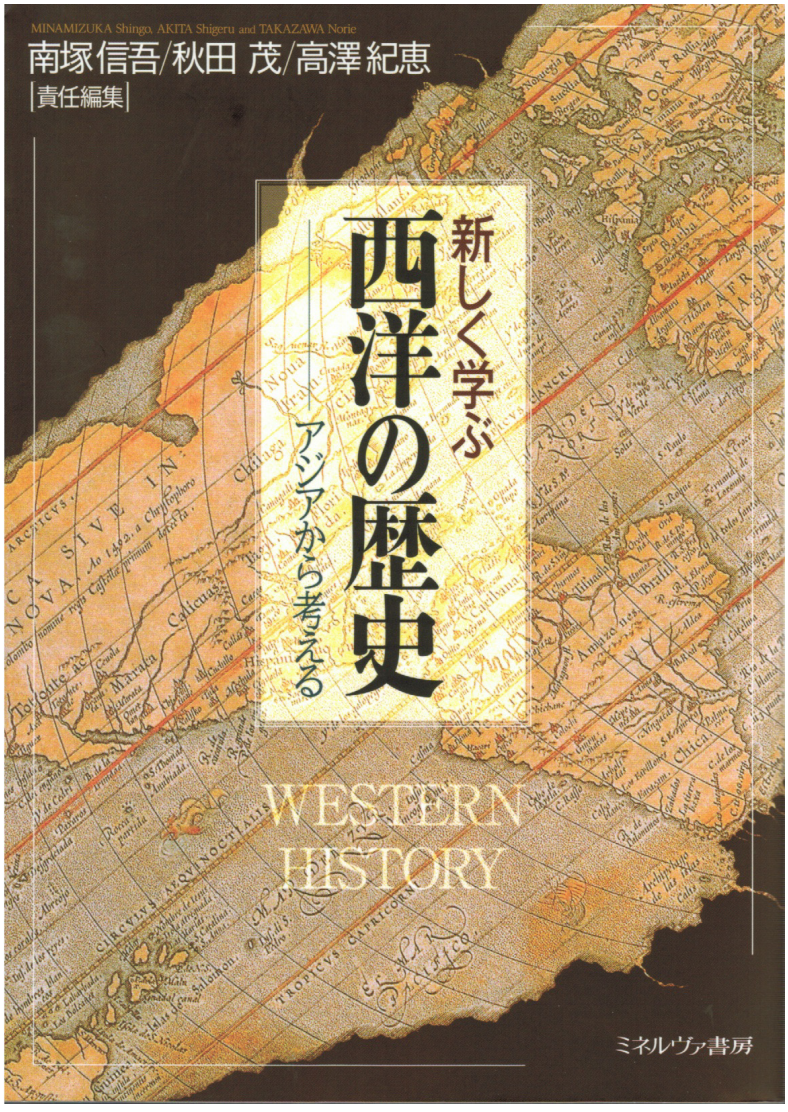
新刊紹介

南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵（責任編集）
『新しく学ぶ西洋の歴史—アジアから考える』
ミネルヴァ書房、2016 年
秋山晋吾（『新しく学ぶ西洋の歴史』編集委員）

いまあらためて「西洋」の歴史を書くとすれば、どのような形が可能なのか？しかも、大学生向けの硬質な概説としてまとめるとすれば、どのような形が最適なのか？本書は、こうした課題に応えるべくまとめられた、西洋史概説の新たな試みである。

上記の問いへの答えとして編集委員会が選択したのは、副題が表しているように、世界史、アジア史との同時代性と相互関係を強く意識しながら西洋の歴史を語ることである。そのため、全 14 章からなる本書は、「マルコ・ポーロの時代」、すなわち「世界の一体化の始まり」から説き起こされる。これにより、世界の歴史が、各地域それぞれの歴史の寄せ集めではなく、互いに関連することで成り立っていること、西洋の歴史もその関連性のなかで語られるべきことを明確にした概説となった。

さらに、本書が試みたのは、ある時代の西洋の歴史を語るにあたって、アジアの視点から始める、ということである。本書の各章は、第 2 章「フランシスコ・ザビエルの時代」、第 11 章「核の時代の始まり」というように、各時代を輪切りにする構成を採用している。その上で、各章は、冒頭にアジア史・日本史の専門家による時代概説である「序論」が置かれ、次に西洋の時代概説として「総論」が続き、そのあとに、西洋の各国・各地域の歴史を扱う 6 ～ 8 つのセクションが並ぶ。こうした構成を採ることにより、非西洋の歴史を西洋の歴史に従属するものとして扱うことを拒否し、その上で



西洋各国・各地域の歴史も十分な厚みをもって記述することを目指したのである。

このようにして、西洋史（おもにヨーロッパ史・アメリカ史）の最新の研究成果を盛り込みつつ、アジア史・日本史からの眼差しを導きの糸とする、独特の西洋史概説が実現した。この野心的な企画のため、総勢 102 人、欧米各国・各地域・各時代の専門家から日本史、アジア史の代表的な研究者に至る執筆陣が結集した。各セクションは標準 2 ページと短いが、エッセンスを凝縮した内容になっており、本書が目指す「硬質な大学生向け概説」という目標は十分に達成できたといえるだろう。今後は、大学の現場でこれをどのように活用することができるかが課題である。本書は、1 講義 1 章の学修により 1 学期間で完了することを想定して 14 章構成となっているが、それにとらわれない柔軟な活用法もできるだろう。西洋史を学ぶ大学生、これを教える教員にとって、また、一般の読者にとって「新しい西洋史」像を見出すツールとなることを期待している。

RIWH アフリカ奨学基金第 4 期 ご寄附のお礼

世界史研究所では皆さまの篤志に支えられて、2011 年度から「世界史研究所アフリカ奨学金」の制度を運営しております。今年 3 月末までは、第 4 期奨学金のご寄附を募って参りました。ご寄附をお寄せいただいた皆さまには、深くお礼申し上げます。

受賞者の紹介、受賞式の様子などは、ニューズレター次号に掲載させていただきます。

また、第 5 期の寄附を 2017 年 3 月末まで募集いたします。送り先は以下の通りです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

三菱東京 UFJ 銀行 渋谷支店

口座種別　普通預金

口座番号　0683412

口座名義　（特）歴史文化交流フォーラム 理事 南塚信吾

『21 世紀歴史学の創造』の寄贈先を募集します

世界史研究所より所長南塚信吾が執筆に参加した、研究会「戦後派第一世代の歴史研究者は 21 世紀に何をなすべきか」編集、『シリーズ 21 世紀歴史学の創造』（全 9 巻）、有志社、2013 年を、図書館や研究所等公共性のある 10 機関に寄贈いたします。シリーズの詳細は、有志社のウェブサイト（http://yushisha.sakura.ne.jp/newpage21c.html）をご参照ください。

ご希望の方は、全 9 巻一括でのお申し込みに限らせていただくこと、先着順での受付とさせていただくこと、また着払い送料をご負担いただくことをご了承のうえ、

world_history@npo-if.jp

まで、メールにてお問い合わせください。

お知らせ

世界史研究所ウェブサイトのリニューアルに関するお知らせ

世界史研究所では、研究所ウェブサイトを通じて電子化された世界史研究の情報の収集・発信を行っていますが、一昨年、千葉大学に設置されていたサーバーがサイバー攻撃を受け、データが損失し、サーバーの移転を余儀なくされました。皆さまにはご迷惑をおかけしました。深くお詫び申し上げます。昨年秋、ウェブサイトをリューアル致しました。新ウェブサイトのアドレスは、次のとおりです。

新 URL： **http://www.npo-if.jp/riwh/**

現在、可能な範囲でデータの復旧に取り組んでおります。引き続きご不便、ご迷惑をおかけいたしますが、何卒ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。なお、世界史研究所「ニューズレター」のバックナンバー各号に関しましては、新ウェブサイトより PDF 版がダウンロード可能です。

今後とも、当研究所ウェブサイトにご愛顧を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

本ニューズレターへのご寄稿は随時承っております。
文献紹介、研究情報など、世界史に関するご投稿をお考えの方は、当研究所までご連絡ください。

『世界史研究所 Newsletter』編集担当一同

発行日：2016 年 04 月 15 日
発行者：NPO-IF 世界史研究所

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 10F
tel: 03-3400-1216　fax: 03-3400-1217
e-mail: world_history@npo-if.jp　URL: http://www.npo-if.jp/riwh/

スタッフ

所　長	南塚 信吾（千葉大学・法政大学名誉教授）
顧　問	下村 由一（千葉大学名誉教授）
	百瀬 宏（津田塾大学名誉教授）
研究員	木村 英明（早稲田大学講師）
	木村 真（日本女子大学講師）
	鈴木 健太（東京外国語大学特別研究員）
	山崎 信一（東京大学講師）
	姉川 雄大（千葉大学特任助教）
	崎山 直樹（千葉大学特任講師）
	鹿住 大助（島根大学講師）
特別研究員	稲野 強（群馬県立女子大学名誉教授）
	近藤 正憲（学術博士）